

特集◎言語接触が拓く世界

ニカラグア手話と言語接触研究

ダニエル・ロング／宮本一郎 (Daniel Long／みやもと いちろう)

ニカラグア手話の出現は言語学界を大きく揺るがした。この手話言語を題材にBBC放送が一九九八年に制作したドキュメンタリー番組には、著名な社会言語学者や言語接触論者のほか、チョムスキーまで登場している。

本稿では、まずニカラグア手話の形成過程や言語学的特徴について概説する。次に、中米から遠く離れた日本で、なぜ手話を研究している人や日本のろう者コミュニティが関心を寄せているか検討する。最後に、これまで手話の研究や使

用とはほとんど縁のなかった(自分のような)人がどうしてこれほどニカラグア手話に強い関心を寄せるようになったかを考える。

●ニカラグア手話の形成過程

ニカラグア手話の出現は「ことばのビッグバン」とも言われている。世界中の言語学者がこれほど注目するようになった最大の理由はその起源にある。この手話は、ほとんどゼロからスタートし、数年の間に英語や日本語、日本手話、アメ

リカンサインランゲージといった言語と同じ程度のものへと発展した。

ニカラグア手話は接触言語の一種、つまり、人と人との接触の中で発生した言語である。その歴史的沿革は次の通りである。中米のニカラグアでは、一九八〇年ごろまで、手話が使われていなかった。その理由は、そこにろうの人はいたが、ろう者のコミュニティが形成されず、個人個人が聴者(健聴者)の家族に囲まれて、他のろう者と接触しない暮らしをしていたからだと思われる。

一九八〇年頃、長い内戦状態が終わったニカラグアにろう者のための職業訓練学校が設立され、それまで各地で孤立して生活していた十代前半の若いう者が首都マナグアに集まって来た。彼らは、それぞれの家族の内でも自然発生的に生じたジェスチャー「ホームサイン」(家庭内身振り: mimicas)を持ち寄ってきた。これらは手話言語から程遠い、非常

に原始的なジェスチャーに過ぎなかった。ちゃんとした手話言語のように、単語があつて、それをつなげる規則(文法)があつたわけではなかった。それどころか、一つの手振りが一つの発想全体(例えば、「私はお腹が空いている」)を表わしていた。しかも、こうした発想を

表わすホームサインは家庭によって異なっていたため(腹を触る、口内を指で指す、食べる動作を模倣する、など)、お互いのホームサインが通じなかった。しかし、見る見るうちに、彼らの身振りに変化が見られ、著しい進化が生じた。個人差が徐々に目立たなくなり、身

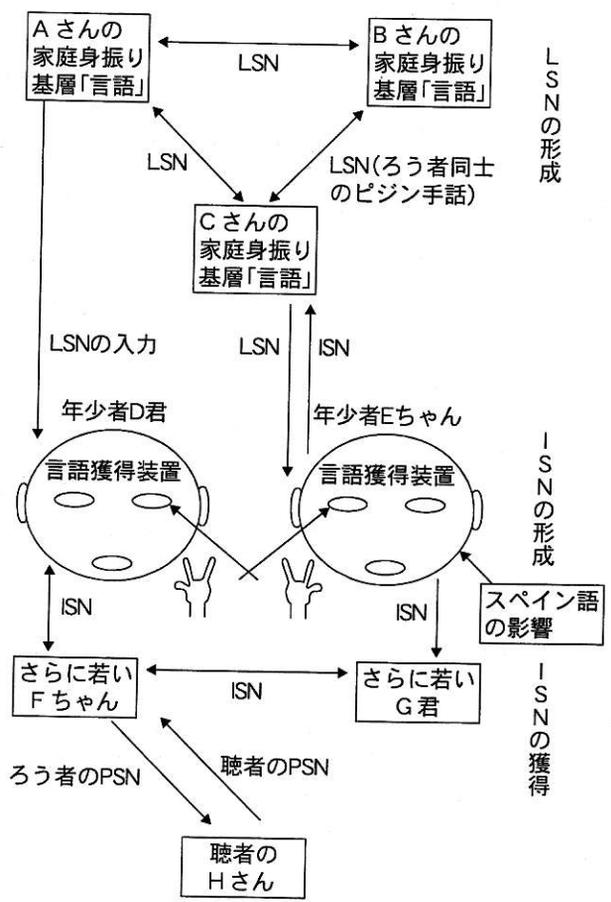


図1 ニカラグア手話の形成過程

振りに共通性が見られるようになった。一方、その身振りをつなげる規則、すなわち一種の文法体系が自然発生的に生じてきた。これは一般の言語体系に比べて原始的な文法だった点や、人々が集まって接触することによって生じた単純(不完全)な文法を持つ言語体系であった点などから、研究者の間で「ピジン」との共通点が指摘された。この段階でのニカラグア手話を LSN (Lenguaje de Señas Nicaragüense、ニカラグア手話(ことば)と呼ぶ(図1))。

数年後、一九八〇年代後半には、LSNは変異に富んだ不完全なピジン手話ではあったが、それを見て育った年少者はその入力(input)を受けた。年少者は、不完全なLSNを、人間が生まれながらにして持っている「言語獲得装置」に通すことによって、完全な手話言語体系へと変化させた(クレオール化)。ISN (Idioma de Señas Nicaragüense、ニカ

ラグア手話言語」と呼ぶ。

ここで断っておきたいが、ニカラグア手話の話者はLSNとISNの違いをあまり意識しないし、区別していない。しかし、研究を進める上で、学者はこれが有効な区別だとしている。LSNがISNへと発展した時に次のような複雑化が見られた。①空間について、胸の前に、且つ、平均的に額から臍上及び両肩幅の空間に表出している。②両手使用の場合、対称／非対称、接触／非接触によって、意味や機能が変わる。③顔の表情が体系的で文法的な意味を持っている。④口話が簡略化されている。これらは言語の派生化、高機能化、体系化を示唆する変化である。

それ以来、このろう者コミュニティの中で自らこの手話言語の標準語化（変異の統一、新語の設定など）が進み、その研究、辞書作成なども行われはじめた。

●日本の手話使用者とニカラグア手話

さて、国内外のろう者コミュニティや手話言語学研究者の間では、「言語接触」研究が盛んであり、なぜニカラグア手話に大きな関心を寄せているかについて、次のようなことをあろう者から聞いたことがある。

一般言語学における手話言語学研究が認められつつある中で、新たな疑問や課題が発掘されている。

(1) 日本語対応手話は、一種の接触言語ではないか。それは手話を母語とするろう者が手話語彙を日本語文章に合せようとして作られたものであるが、聴者自身が日本語文章に合せたものも、また、違うものであるといわれている。混合言語か、中間言語か、相当するものが未だに見当たらない。

(2) 国際手話 International Sign/Gestuno は、各国・各地域の手話が簡略化された言語、或いは、簡略化されたコミ

ュニケーションツールであろうか。発祥地である欧州の、複数の地域から手話言語の共通部分を寄せ集めたものだから Koine に相当すると考えてよいか。

(3) ろう児の九割は、日本手話を知らない聴者の両親のもとに生れるといわれる。そのろう児の多くは、ろう学校などの手話環境に来て、初めて手話を習得するのであり、手話環境の中で育てられたろう児の言語習得に比べても、聴児の（音声）言語習得に比べても、言語獲得・形成が遅いのではないか。更に、多くのろう学校では、ろう児を迎える教育環境の手話言語が確立されていないという事実もあり、ろう児の言語獲得・理解の遅れの一因ではないか。

従って、彼らにとって手話が唯一の母語であるにもかかわらず、手話が不完全で、日本語より劣等的な言語であるという誤解に基づく日本語本位意識の抑圧も重なり、言語的アイデンティティが確立

されないろう者も多くいるといわれる。

●言語接触論者とニカラグア手話

言語学者、特に言語接触論者はなぜニカラグア手話に対しこれほど強い関心を持つようになったのか。ニカラグア手話研究の意義はどこにあるか考えよう。一見してLSNはピジン化、ISNはクレオール化に匹敵しているようにみえる。しかし、これまで記録、分析された接触言語とは大きく異なる点もある。

(1)単なる単語や一語文に過ぎなかった家庭身振りを、ピジン言語のようなLSNに発展させた若者、それをさらに完全な言語体系(ISN)へと発展させた子供、彼らはまったく言語を持つていなかったにもかかわらずこうしたことを成し遂げられたのはなぜか。これは人間に生まれながらにして備え付けられているとされる「言語本能」や「言語獲得装置」の存在を裏付ける発見である。(2)初期の

若者たちは十代半ばから集まって来た。

言語形成期を越えてから他のろう者とコミュニケーションを取り始めた若者はやはり完全な言語体系を作りあげることができなかった。(3)とは言え、逆に言えば、彼らですら、ピジンのような言語体系(LSN)を作り上げることができた。(4)LSNをクレオールに発展させるには、まだ言語形成期を終えていない小さい子供が必要だった。

LSNはピジンのような不完全な間に合わせ的な言語だ。実はニカラグアの手話使用者が使うもう一つのピジンがある。ろう者と接触頻度の高い聴者の中には簡単な手話が理解できる者がいる。ろう者が彼らとコミュニケーションを取るとき、自分の母語とも言えるISNを単純化して使うことがある。ろう者にとって、これはフォリナートークに近いものだが、研究者はこれをPSN (Pidgin de Señas Nicaragiense)と呼んでいる。

る。そして、聴者からすれば、これは自分が単純化した手話ではなく、むしろ中間言語に近い。ろう者、聴者がそれぞれ違う立場からこのピジンを使っているため研究者はこれを「対称的ピジン」(symmetrical pidgin)と呼ぶ。初期段階のLSNもピジンめいたところがあつたが、LSNを形成した若者たちはみんな同じような立場にいた(家庭身振りしか使えない)ので、このピジンを集団内のピジン手話(peer group pidgin)と呼ぶ(図1)。

●おわりに

以上ニカラグア手話の形成過程やその意義について考察したが、この「ことばのビッグバン」と言われている発見によって言語接触論が飛躍的な発展を遂げたのは間違いない。

(ロング：首都大学東京／言語接触論)
(宮本：全日本ろうあ連盟／手話研究)